

世の姉妹達よ、共に力を合せて、多年「女に何にが出来来る」と軽蔑し来つた男子を驚かせましょう。



西川文子・木村駒子・宮崎光子 主宰

女性問題をはつきりと意識して創刊された
女性雑誌『新真婦人』――

『青鞥』の対抗誌として名のみ有名な本誌の
実体を明らかにし、「新しい女」の時代を検証して
近代女性史の書き替えを迫る復刻！

しんしんふじん

新真婦人

復刻版

全6巻・付録1・別冊1
揃価格120,000円

一九一三(大正二)年五月
一九一六(大正五)年四月

不二出版

婦人問題の中心点は云ふまでもなく、婦人自からの自覚、実力の養成にあらねばならぬ。

◎『新真婦人』は、一九一三（大正二）年五月、新真婦人社の機関誌として創刊された。初期の女性社会主義者西川文字・木村駒子、宗教者宮崎光子らの主宰による女性解放運動雑誌である。

◎『新しい女』がキー・ワードとなっていた時代に誕生した女性運動のひとつとして『新真婦人』は、創刊当初から明確に女性問題・女性解放を見据えた評論雑誌となつてゐる。男性中心社会を糾弾する筆は厳しく、また執筆者も多彩で大正デモクラシー期の女性運動の息吹を十分に伝えており、新真婦人社を単なる青鞥社の対抗者あるいは亜流としてきた女性史・近代史に書替えを迫る内容をもつてゐる。

◎未婚の女性には恋愛なき結婚をするなど説き、既婚者には積極的に生きることをすすめるのをもつても、『青鞥』が、いまや男社会と切り結ばんとしている『妹たち』の解放運動ならば、『新真婦人』は、既に恋愛結婚を實踐し治警法改正や社会主義運動を経験した『姉たち』の現実的な運動であつたことがうかがえる。

◎本誌は、創刊一年足らずで木村・宮崎が西川と袂を分かち、以後一〇年余にわたつて西川が中心となつて刊行されつづけた。

大学・公共図書館等にはほとんど所蔵がなく、これまで僅かな個人所蔵が確認されていたにすぎなかつた本誌を、第三年まで発見されたことを機に第三六号までを六巻に合本して復刻するものである。

なお三七号以降は散逸のためほとんどが見えぬが、現在まで発見されている一三冊を合本し付録として付す。

◎女性史研究・思想史研究にとって貴重な資料として提供する。

不二出版



→新真婦人会のひとびと 前列左から伊藤朝子・西川文字 一九一四年三月一六日、本郷の岩野清子宅にて（写真提供―柏木隆法氏）

←第一七号表紙 一九一四年九月



新 真 婦 人 第 一 号

宣 言

私たちが銘々の心の奥底には、尊い真な活きた者があります。この無限の潜在力をどこまでも發揮しやうと努力しますが、新しい真の婦人の生活であつて私たちは自から之れに向つて努力すると共に、また他の御婦人がたへも御勧め申したいのであります。之れが私たちが此の雑誌の發行を企つるに至つた目的であります。

▲詳しく申しますと、未婚の御婦人方には戀愛なき結婚をなさるな、婦人の人格を認めぬ男子とは結婚なさるなとお勧め、既に家庭の人となれる御婦人方には、モウ妻となり母となりては駄目ですわねと、消極的自暴自棄に陥ることなく、ドコまでも積極的に行く様にお勧め、更に女に對する社會の感情を一掃し、自然にあるべきよりも狭められたる婦人の活動の範圍を廣くすることに努力するのが即ち本誌の目的であります。

▲尚、女の手のみにて編輯し、經營し、直接には少しも男子の助力を仰がぬと云ふのが、本誌の一つの特色であります。婦人の地位を高める爲めに、婦人自からのみにて、雑誌を發行することは、日本では之れが最初の試みでありましょう。世の姉妹達よ、願はくば相應の力をお貸し下さい、共に力を合せて、多年「女に何かが出来る」と輕蔑し來つた男子を驚かせましよう。

従来の近代女性史の欠落を埋める◎天野茂

この度、不二出版が『新真婦人』の三巻揃い入手して復刻の準備に入ったと聞き、かねてからその復刻を熱望、この日の到来を期待していた私は、大きな喜びを感じている。

同社編集部は、私が生前の西川文子女史から譲り受けていた『新真婦人』二巻二四冊と品川力氏によって発見・提供されていた三冊を参照、ほかにも研究者・研究機関の協力も得て入念の復刻本を成就した。大正二（一九一三）年五月創刊、大正一一（一九二二）年九月関東大震災による廃刊、以後埋没していた『新真婦人』誌を八〇年後の今日に見事に復活させた、と言えよう。

初期『青鞥』について、福田英子は、「らいてう女史の識見は高いが、それは人生問題であつて、婦人問題ではない。」と言つたという。その「婦人問題」を主として、『青鞥』の読者層とは異なる、働く女性をふくむ一般庶民層の女性を対象に、具体的な、實際生活に繋がる婦人論、社会論、海外思潮紹介などによつて、女性の自覚、思想の向上、職業活動の進展に資し、婦人解放、男女平等、参政権獲得、男女相補の平和社会の実現への歩みを進めたのが、『新真婦人』一〇年の歴史であった。

今回の復刻によつて、この『新真婦人』の意義が新たに評価され、従来の近代日本女性史における、この辺りの欠落が補われることを期待したい。

（平民社女―西川文子女史の編著者）



第三号表紙 一九一三年七月

「婦人問題」が社会問題となつた時代の女だけの手による雑誌◎井手文字

平塚らいてうとその仲間たちによる『青鞥』は、日本現代史に確実な地位を占めているが、同時代でも異なる出生・境遇に生きた女たちとどのようなにかつたかの研究は、まだ十分にされていない。今日復刻される『新真婦人』はこの問いに答える貴重な資料である。

従来『新真婦人』は『青鞥』の最盛期に影の対抗誌として発行されたといわれ、らいてうもこの雑誌を「ものわりの良いおばさん達のさほど新しくない雑誌」と批評し、この批評が主流の評価となつてきた。だが、一度これを手にしてみると、「女だけの手による女のための雑誌」は『青鞥』だけではなかつたと思わせる。編集者たちは青鞥同人よりやや年齢が高く、古めかしい堅さや常識への妥協がみえるが、中心の西川文子や宮崎光子、木村駒子らがかつて自由恋愛を實踐し、社会主義思想に接近した過去もあつて、妻や母の生活から抜け出ようとする願望があり、より広い社会の問題に触れていこうとする姿勢がみえる。

この雑誌には与謝野晶子や尾竹紅吉ら文学関係だけでなく、翻訳家の高野重三、評論家の三宅雪嶺、茅原華山、あるいは医師の吉岡弥生、美容師の先駆者となる遠藤はつ等の名が載つて、雑誌の視点を広げている。婦人問題を社会問題として捕えようとする意図が、この雑誌を全巻一二四号、約一〇年の発行を続けさせた理由といえるだろう。

（女性史研究者）



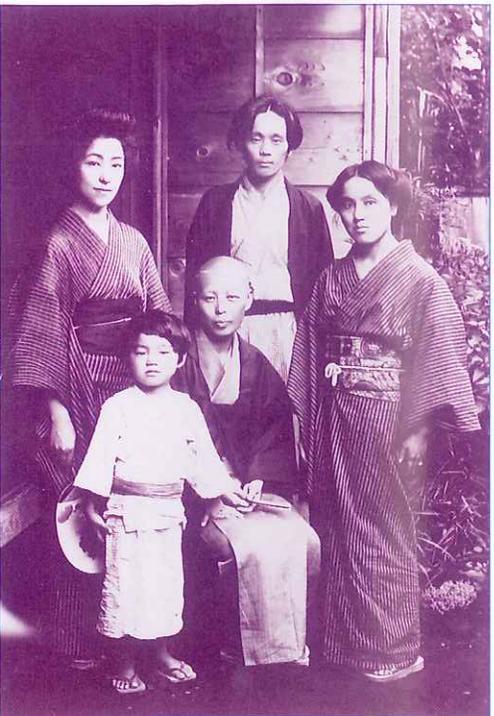
左から西川文子・木村駒子・宮崎光子
一九一二年頃（写真提供：天野茂氏）

より多くの女性の近代的自覚へ◎小田切秀雄

『青鞥』の鮮烈なイメージにばかり気をとられて、そのかげにくすんで見えたこの『新真婦人』の運動の展開に十分な注意を向けることをしないと、近代日本の女性の自覚の発達史はとらえられぬ。

めざめたばかりの女性の自我の、そのきつさの知的なまた文学的な表現が『青鞥』だったとすれば、少し遅れて登場したこの『新真婦人』は、より着実に民衆の實生活に密着しながら、女性の自覚をひきだそうとして多くの成果をあげた。雑誌にはその様子が生き生きと伝えられ、また所収の文章にもおもしろいものが多い。

（文芸評論家）



右から遠藤（若野）清子・遠藤達之助・伊藤朝子・岩野民夫・日向きむ子
（写真提供：柏木隆法氏）

フェミニズム批評の成熟のために◎渡辺澄子

一九一〇年代はフェミニズム批評史上、興味の噴騰する時節である。特に女性が人間として生きることに覚醒し、儒教的徳目の緊縛から解放されたいと願つてあげた声の激しさには圧倒されるものがある。『新真婦人』は戦後の女性史研究のなかで『青鞥』の栄光の高唱に隠され、彼女らに對立するいささかうさんくさい一派とみられがち不幸に見舞われてきたが、いまなお未確立の男女平等の問題にとつて、さまざまな課題を提供してくれるなかなかおもしろい雑誌である。

創刊号巻頭の「宣言」に、男性の助力を仰がず女だけで編集・経営する日本最初の試みとあえて胸を張つたところに、『青鞥』は男性の助力を得ているではないか、というライバル意識がみられるもの、彼女たちも夫の助力を得ていてこの点でもお互いさまであるばかりか、女性の自覚・自立を掲げた創刊目的も共通している。両誌にまたがる執筆者も多い。競争や相互批判が「家」や男に忍耐・献身を強いられてきた女たちの意識をかきまわしたことの意義は大きく、この熾烈な切磋琢磨の真相の詳細を、遅きに失したとはいえないまよやく目に来るのは有り難い。

本復刻はフェミニズム批評の成熟に向けての、足幅ひろい一步を踏み出させるはずである。

（大東文化大学教授）



婦人問題大演説会 一九一五年五月五日、青年会館にて
壇上は与謝野寛（第二六号より）

女が男に圧制される、と云ふことは、新らしいことではない、併し其の圧制されてる女が、圧制に気の付いたのは新らしいことである。

復刻版概要

菊判 上製 総約4000頁

復刻版巻数 原本号数 原本発行年月

第一巻 第一～六号 一九一三年五月～一〇月

第二巻 第七～一二号 一九一三年十一月～一四年四月

第三巻 第一三～一八号 一九一四年五月～一〇月

第四巻 第一九～二四号 一九一四年十一月～一五年四月

第五巻 第二五～三〇号 一九一五年五月～一〇月

第六巻 第三一～三六号 一九一五年十一月～一六年四月

付録 第三三・三六〇～三六二・三六四・三六五・三八〇・八二二～八四四・九一・九五・一〇二号
一九一七年九月～二十年十一月

別冊 解説(岡野幸江)・総目次・索引【別冊のみ分売可 1,000円】

推薦人——天野茂・井手文子・小田切秀雄・渡辺澄子(五十音順)

揃価格 120,000円

一九九四年一〇月刊



*なお、小社ではPR誌「本郷だより」を不定期刊で刊行しておりますが、『新真婦人』復刻にあたっては、次の特集を刊行いたしました。ご利用ください。(九四年一〇月刊行)
第二号 柏木隆法「伊藤朝子と『新真婦人』」
田中英夫「西川光二郎と『新真婦人』」
また、既刊の第二号(九三年六月刊行)にもウルリケ・ヴェール「『新真婦人』にみる恋愛と結婚の言説」があります。(無料送付)

●本カタログ中の表示価格は、
全て消費税を含んでおりません。
●弊社は注文制です。
お近くの書店にご注文ください。

不二出版

〒113 東京都文京区向丘1-2-12
電話03-3812-4433
ファクシミリ03-3812-4464
振替00160294084
一九九四・一〇

一日も早く男子中心の思想が毀れて、真に男女が平等に立ち、共に手を携へて人生の戦いを戦ふと云ふ時代の来らんことを……